

生官、昭和二年三月學位受領、昭和四年六月衛生學研究の爲、英、佛、獨、米の四國に在留、昭和五年度より二ヶ年間、文部大臣より自然科學獎勵金を受け、同七年「日本人の體質改善特に身體的作業能力の研究」なる一大論文を發表、爾來、益々研究を進めつゝ、以て今日に至る。

△岡山縣苫田郡田邑村田口龍治郎の三男、明治十七年生る。眞面目なる學究的温厚の紳士にして、終始體育の研究に没頭して今日に至る閱歴は、既に博士の前半生史に盡きて躍如たるものあるを見る。今は其の學識、手腕、人格共に愈々圓熟の域に入りて格段の貫祿を加え、斯界の重鎮として重きを爲す。猶前途洋々として隆興發展の餘地ある體育界は、將來博士の努力精研に期待するもの益々大なるを思ふ。人と爲り穩健にして篤實、軍人氣質の人には珍しきほど腰が低く、學者として敢て衒はず、眞摯にして町重なる態度は、人に好感を與へ、自ら其の高邁なる人格を敬慕せしむ。林山は其號にして美術を愛好す。東京市杉並區下高井戸一の二五一に住む。

### 岡田道一

△久しく東京市學校衛生技師として東京市教育局に勤務し、多年東京市の學校衛生界の爲め活躍奮盡する所ありし岡田道一博士は、曩に官海を勇退して以來、小兒科専門を以て自宅開業せり、開業經營日尙淺きに拘はらず、多年扶植せる篤き聲望と、博士獨特の打診の好評とは兩々相俟つて大衆より多大の信望を享け、近來著るしき發展振りを示しつゝあり。博士は京大系の小兒科學者にして又た錚々たる我國での學校衛生學者たり。殊に博士が公職十年間一日の如く、専ら麹町區技師として貢獻せる功績は偉大にして、市民より多大の尊敬を受け噴々たる聲望を博せり。斯間博士は又た公務の傍ら多年有力なる新聞雜誌及放送局等の依囑を受け、筆を寄せて學校衛生に關する論壇を賑はし、或はマイクロホーンを通して諄々と説き、以て公衆衛生の普及指導に務めしは著名にして多く世人の周知する處なり。

△東京市の人にして、明治二十二年生る。一高を経て、大正六年京都帝大醫科大學を卒へ、直ちに日本橋區濱町病院に、次で内田小兒科醫院等に勤務し、傍ら父君の開業を手傳ひしが、大正八年四月より學校衛生に趣味を感じ麹町區市立小學校専任教師となり、次で麹町區衛生技師に任ぜらる。斯間東京市に一つもなき夏季林間學校を大正九年以來毎年區内に開校せるは當時世に稱讚されたる所なり。昭和三年十月學位を受領し、同九年一月東京市學校衛生技師に任ぜられ教育局に勤務す、次で辭職後開業一般小兒科の診療に従事し今日に至る。

△學位論文は「學校衛生ニ關スル知見補遺」が主論文にして、参考論文としては、(1)「フエリエンコロニー」ニ關スル研究、(2)學童口腔衛生ノ研究の二篇あり。學位は慶大より受領せり。著書としては、「學校家庭兒童の衛生」等十數冊あり。

△當年不惑に入る七歳にして年壯の意氣益旺也。もとく名にも金にも無欲派なる學者肌の人にして、早く診療界を離れて、専念教育界の爲め精進して又た他事を顧みず、熱心なる學校衛生學者として自他共に任じ、爲斯界多年努力貢獻する所ありしが、多年の經驗を基礎として再び小兒科醫を以て立てる博士の將來を至囑して止まず。趣味としては和歌を能くし、音曲として義太夫を愛し、蝶花の號を以て素義界に公表す。大正八年以來住み馴れし麹町區を後に未だ草深き郊外に移り、今は豊島區長崎仲町一ノ二九八〇に住む。

### 飯村保三

△内務省衛生局に防疫官として十數年一日の如く勵精し、一意専心、唯だ至誠以て公に奉ずるの信念を以て終始し今日ある飯村保三博士は、東京府の人、明治十六年生にして、同三十六年醫術開業試験合格、其後若干開業醫としての經驗も經たるが、餘り成績も香ばしからざりしと見え、轉向して所謂「役人」道に精進して以來静岡、青森の諸縣に技師となり課長を歴て、大正九年四月内務省衛生局に入り以て現在に至れり。斯間南米各地に於



ける衛生状態視察の爲め出張を命ぜられ、序を以て歐洲へ出張を被仰付、親しく海外の衛生事情を視察調査して研鑽大に得る所あり。

△學位は昭和四年十一月慶大より受領せるが、學位論文としては「日本ニ於ケル「ベスト」ノ疫學ニ關スル綜合的研究」が主論文なり。氏が開業試験出身の才學を以て奮興して以來、春風秋雨の努力研鑽を續け、克く初志を貫徹して終に本論文を完成せる堅志篤學に至りては、立志傳的典型たるの人物として敬服に値す。著者は眞摯なる學究の士として多大の敬意を表するに吝ならずと雖も、現代一般世人が要望する博士に就て認識を得んとするに對し、博士は博士の紹介を忌避するところ餘りに狹量にして時代を解せざる嫌なき乎、獨り博士のみと言はずよく學者を氣取りてか、或は自己の人物を過信してか、往々にして吾不關焉の態度を持し、得々たるの士今猶其跡を絶たざるの傾向あり、學位と共に人格尊重の叫び益々酣ならんとするの今日、甚だ遺憾也。茲に特筆して一部學者の反覆自省を促すと共に、識者の批判を仰がんとす。現住所東京市淀橋區西大久保三ノ五一。

#### 代田 稔

△京都帝大助教として醫學部微生物學教室に新人代田稔博士あり。「一國の文化は科學の發達に因つて進む、極く僅かの帝大の研究費をまで節約すべき物の中へ數へるのは間違つて居るかと思ふ。科學者殊に純科學者の生活に對する不安だけを去つたらと思ふ。フランスで切手にナポレオンを入れずにバストールを入れたことを日本の政府の人々にも考へてもらひ度く思ふ」云々と、現代學界に對する感想の一片を吐露して大に氣を吐けり。博士は京大系の微生物學者にして、恩師清野謙次教授の指導を受けて斯學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せる後も引續き研究に没頭しつゝありしが、講師を歴て助教となり、久しく母校の教壇に起ちて其の蘊蓄を傾け、專念學生の指導に努力精進する傍ら、碎心孜々として自己の研究に一路邁進しつゝある前途や更に大に期待せらる。

△博士は郷里の長野縣立飯田中學校より、二高を経て、大正十四年京都帝大醫科大學を卒へ、爾來其の専門とせる微生物學研究の爲め母校に止まり、講師を経て助教に任官今日に至る、斯間昭和五年二月學位を受領せり。主論文は「比色計ニヨル補體結合反應ノ特異度ノ研究」にして、參考論文として「急劇ナル小兒腸炎ノ病原體ニ就テ」の外十篇あり。其他論著中「腸内細菌(病原並ニ非病原)」は博士會心の作にして、氏が最も得意とせる論文として見逃すべからず。氏の出身地は長野縣下伊那郡龍丘村にして、代田半七の三男、明治三十二年生る、年齒漸く三十有七歳也。直情徑行の人にして、阿諛迎合を好まず、長上に對して愛想よく出來ざる迄も、後進を愛し學生を指導するに篤く、人に對して親切あり温情に富む。文學趣味豊かにして文才あり、洋樂を樂しみ、又スポーツを好む。前途猶洋々たるの秋、折角の努力奮闘を望むや切也。京都市上京區出雲路松ノ下町一六に住む。

#### 石川 光昭

△新進なる公衆衛生學及び細菌學者として、現在東京慈惠醫科大學に於て社會醫學講座を擔當しつゝある教授石川光昭博士は、慈惠醫大出身の秀才にして嘗て米國に留學し、ケンダル教授等の指導を受ける所厚く慈惠醫大より學位を得たる斯科界近來の名醫博也。未だ少壯にして潑刺たる前途は更に矚目せらるゝ所多し。

△博士は東京府立第二中學を経て、大正十二年慈惠醫專を卒へ、直ちに同校細菌學教室に勤務、同十四年二月渡米しセントルイス市ワシントン大學細菌學及び公衆衛生學教室に於て、初めフェロー、後にリサーチ、アツシスタントとして研究、昭和二年マスター、オヴ、サイエンスの稱號を受く、翌三年シカゴ市ノースウエスタン大學醫學部インストラクターに任ぜらる、同四年末歸朝、同五年四月學位受領、同年同月以來慈惠醫大に於て社會醫學講座を擔當今日に至る。

△學位論文は全部英文の原著にして、主論文 Bacterial Decomposition of Urea, with Special Reference to the



Influence of Carbohydrates 参考論文 (1) Effect of Insulin on Cultures of *B. vulgarius* and *F. aedisphinus*, (with A. I. Kendall) (2) Effect of Insulin on Cultures of *B. caliginosus* and *H/61* (with Kendall)  
(3) Gas Production by Bacterial Symbiosis, with Special Reference to the Influence of Nitrogenous Substances (4) Chemical and Bacterial Inhibition of Gas Formation in Bacterial Cultures (5) Influence of Iodide on Bacterial Decomposition of Nitrogenous Substances 外英文十篇あり、他に論文夥多。著書としては (1) 醫學の史的展望、(2) バクテリアと人生、(3) 社會醫學の諸問題等あり。  
△東京府西多摩郡熊川村石川三津造の長男、明治三十年生る。年齒三十有九歳、意氣益壯にして、學究的熱心なる少壯學者也。「醫人は社會の情勢を認識するの要あり」との意見の持主にして、該博なる學識を有し、思慮あり識見に富む。其の教壇に起つや、熱誠克く新知識を披瀝して諄々と説き、學生をして能く熱心に傾聴せしむるの辯舌と人格とを有す。讀書家にして書見を業餘の趣味とし、又釣魚を好み時に太公望を極め込むことあり。春秋猶頗る豊富、學界における前途は洋々として益々多望也、切に自重加餐を祈る。東京市淀橋區下落合三ノ一五〇一に住む。

### 上村行彰

△衛生學者にして豫防醫學を最も得意とする從四位勳四等上村行彰博士は、五高醫學部出身の篤學者にして、京都帝大より學位を獲得せる斯科界の名醫博なるが、研鑽多年、斯間主として指導を受けたるは故北里柴三郎博士及び佐多愛彦博士にして、此他専ら克己獨學の結果、老來五十有八歳の高齡を以て學位を獲得せるは、醫博界近來稀に見る所にして、立志傳的異彩に富む博士人物として推獎に値す。而かも其の學究的不撓の精神氣概は頂門の一針として學ぶべき也。

△博士は明治二十四年第五高等中學校醫學部卒業後、鹿兒島市立病院醫長を経て、内務技手に任じ内務省及び東京衛生試験所に勤務し、官立痘苗製造所技手に轉じて大阪に在勤、次で千葉縣技師に任じ衛生課長の職を勤め、更に大阪府技師に轉じて府立難波病院長たること十八年に及び、此間防疫官に任ぜられ大阪府衛生課長として府下衛生の進歩發達に貢獻し、大正十三年内務技師(勅任)に任ぜられ職を辭す、爾來閑地に就き昭和五年六月學位を授與せらる。  
△主論文は「虎列刺豫防消毒方法ノ史的觀察」にして、外に參考論文十篇を添ゆ。幾多論著中「軟性下疳菌ニ關スル研究」の諸篇は博士快心の論文にして學界に重要せらる。著書としては「細菌研究法新論」の他に公娼の科學的研究の濫觴たる「賣られ行く女」並に「日本遊里史」あり。

△博士は鹿兒島市冷水町士族上村行雄の長男にして、上村雄醫博(西宮市にて開業)の兄たり、明治六年生れにして當年六十有三歳也。學究的眞面目なる老紳士にして、老來矍鑠として猶壯者を凌ぐの意氣を有し精力甚だ旺盛也。其の今日ある篤學と其の成業は博士の前半生史に輝きて躍如たるを見る。若し夫れ氏の感想を聞かんか「永い間實社會を見て來たので腹ふくるゝほど感想あるも一々茲に掲げつくされず」云々と。多年の實驗に富み識見の豊富なる以て知るべき也。人と爲り清廉潔白にして、毀譽褒貶を意に介せず、謙遜自抑して克く人を愛し同情に富む。研究以外の趣味としては俳句を能くし、大阪同人社の幹部に列す、雪明は其の號なり。幸に自重加餐を祈るや切也。堺市綠町四五に住む。

### 高木乙熊

△福岡縣衛生課長たる高木乙熊博士は、醫術開業試験出身より奮起して、獨立貫行、研鑽多年の結果、終に克く慶大より學位を獲得せる立志傳的篤學の士也。茨城縣を振出しに現在に至る迄、既に二十數年間一日の如く衛生技術官として一貫勵精し、至誠以て地方衛生界の指導振興に務め、斯間努力貢獻せる多年の功績は蓋し尠少なからざるべし。



△博士は明治四十一年醫術開業試験合格、翌四十二年傳染病研究所入所、同四十三年茨城縣廳奉職、爾來北海道廳、靜岡縣、群馬縣、埼玉縣福岡縣等の衛生技術官として今日に至る。此の間北島、志賀、宮島、秦、諸博士其他に就て研究し、昭和六年二月學位を受領す。

△主論文は「花柳病ノ豫防ニ關スル研究」にして、参考論文は、(1)群馬縣下ニ於ケル賣笑婦ノ實狀ト公娼問題ノ批判 (2)農村ニ於ケル青年團員男女ノ花柳病、(3)感作「ゴノワクチン」ノ臨床的實驗、(4)茨城縣北相馬郡高野村地方ニ於ケル日本住血吸蟲病ニ就テ、(5)利根川沿岸ニ於ケル日本住血吸蟲病ノ調査、(6)同(第三)、附「アンキロストーマ」ト「ネカトール」、(7)國體的驅蟲ニ用ヒタル「パラジトール」ノ效果ニ就テ、(8)腸「チフス」菌ニ因ル肋骨々髓炎患者ヲ傳染源トセル腸「チフス」ノ蔓延、(9)昨年ノ「コレラ」ノ經驗カラ、(10)旭川區近文部落舊土人衛生狀態調査の十篇なり △博士の感想に曰く「醫者は患者の醫者たると同時に社會の醫者たりたい、それが現在の醫界に對する私の希望であり警告であります」云々。博士は山口縣阿武郡佐々並村高木利祐の三男、明治十四年生、當年知命に入る五歳、精力旺盛にして元氣益壯也。其の今日ある閱歷は博士の面目を語りて餘蘊なし。眞面目なる學究的温厚の紳士にして、意志堅實、直情徑行なる性格の持主也。研究に對する熱心と興味とは今も猶變らず、致々として精研に不斷の精進を續けつゝあり、其の研究的態度の眞摯にして不變實行主義を以て終始しつゝあるは甚だ多とすべし。趣味としては山河の自然を愛す。春秋猶豊富、幸に健康と共に益々奮闘盡力あらん事を翹望して止まず。福岡市西新町百道に住む。

◇  
木村正一 △北海道帝大助教授にして衛生學を講じつゝある木村正一博士は、北海道帝大出身の衛生學者にして、母校の恩師毛利高一教授、井上善十郎教授指導の下に斯學の蘊奥を究はめ、母校より學位を獲得せる新進の名醫博として其の存在を認められ、今や母校の教壇に起ちて學生の指導に専念し、他面又自己の研究に没頭して亦他事

を顧みざるの概あり。年齒未だ少壯にして研究心に富み、潑刺たる前途は洋々として大に囑目せらる。

△博士は弘前中學校、北海道帝大豫科を経て、大正十五年北海道帝大醫學部を卒へ、直ちに同學衛生學教室助手に任命せられ、昭和五年任北海道帝大助教授、同六年四月母校より學位を授與せられ以て今日に及ぶ。

△主論文は「「コレラ」菌ノ培養ニヨル「メヂウム」ノ反應變化ノ機轉ニ關スル研究」にして、参考論文は、(1)下水處理問題ニ關スル研究(三篇)(2)飲料水ノ汚染ニ關スル研究、(3)「ワクチン」製法ニ關スル研究、(4)免疫血清ノ理化學的研究、(5)紫外線ノ反射ニ關スル研究等なり。他の論著中、(1)空氣「イオン」ノ衛生學的研究並ニ余ノ考案セル測定装置、(2)「ワクチン」製造用標準濁濁液ノ製法は博士會心の作にして最も主要なるもの也。

△博士は青森縣三戸郡村木村洋一の長男、明治三十二年生、年齒漸く三十有七歳也。少壯の霸氣に燃え、向學の精神鬱勃として禁ぜず、而かも博士の心願とする齋戒、瞑想、祈禱による研究は禁煙、禁酒、女と酒の出る會には出席せざる主義なり、其の態度の嚴肅にして眞摯なるは稀に見る所也。研究以外の趣味としては兒童の宗教々育に多大の興味を有す。春秋猶頗る豊富にして、精研に餘念なき前途は緯々として餘裕あり、幸に自重加餐を祈ると共に益々發奮研鑽あらん事を望む。札幌市北六條西十三丁目に住む。

◇  
秋元稔 △大阪市立衛生試驗所技師秋元稔博士は、大正十二年長崎醫專の出身にて、京都帝大教授戸田正三博士の指導を受け、以下學位論文を完成して、昭和六年八月京都帝大より學位を獲得せる篤學の少壯醫博也。博士は近來特に米穀問題、農村問題に興味を有し、専念此の方面の研究に没頭して新生面を拓きつゝある前途は頗る刮目に値す。

△主論文は「脚氣ト氣象ノ關係、特ニ産米期ノ雨量ト米穀ノ乾燥ニ就テ」にして、第一編「本邦各地ノ氣候就中降水



量及び降水日數ノ相違ト脚氣死亡率ノ年別變化ニ就テ、第二編「農産物産額ノ氣象別變化ガ脚氣死亡率ニ及ボス影響」、第三編「地方別玄米ノ「ヴァイタミン」B含有量ト脚氣死亡率ニ就テ」、第四編「乾燥米ト濕潤米トノ保存ニヨル「ヴァイタミン」B含有量ノ變化ニ就テ（其ノ一）」、續編「同前（其ノ二）」四年間密封貯藏セル玄米ニ就テノ實驗」、續編「同前（其ノ三）」溫度別貯藏」より成る。外に参考論文としては「ヴァイタミン」B缺乏症ノ發現ニ及ボス濕湿度ノ影響」二編、外四編あり。其他の論文中、(1)國民保健ノ見地ヨリ米穀問題ヲ論ズ、(2)脚氣ハ何故夏秋ニ多イカ、(3)米食ト氣象ニ關スル今昔觀等は最も重要なものにして、博士會心の作と見るべきもの也。  
 △博士は宮城縣仙臺市秋元源次郎の長男にして、明治卅二年生る、當年三十有六歳也。少壯にして研學の念猶鬱勃として禁ぜず、快活、人に厚く又能く後進を愛す。現任所大阪市住吉區平野本町五ノ一〇。

水島治夫

△京城帝大の醫學部は創立以來、多士濟々にして躍進又躍進、茲に聊か品隋せんとする新進の水島治夫博士は、京城帝大助教として衛生學の教壇に起ち、新智識を披瀝して諄々と説く處の熱心家なり。學系は東京城帝大派にして、母校より學位を獲得せる少壯の衛生學者也。嘗て米國に遊學するや、ジョンズ、ホプキンス大學にて教授リード博士の教を受けて衛生學の蘊奥を究むる所あり。今や斯學の新人物として、學究的大なる存在を認められ、潑刺たる前途を矚目せらるゝ所あり。

△顧みて博士の學歷を觀れば、大正十二年東京帝大醫學部卒業、朝鮮總督府醫院及京城醫專に勤務、昭和二年京城帝大助教に任ぜられ今日に至る。斯間昭和三年米國ロツクフェラー財團フェローシップとして渡米し、ジョンズ、ホプキンス大學に遊ぶこと二ケ年、歸朝後同七年一月母校にて學位を得たり。學位論文は「本邦人口問題ノ生物統計的研究」なり。

△博士は岡山縣の人、水島頼助の長男にして、明治二十九年生る、當年不惑に達せる壯少也。學究肌の人、功名榮達に恬淡たり、終始學術の研究に没頭して倦むことなく、其の熱心にして向學精神の潑刺たるものあるは、基礎醫學者としての將來ある所以にして、春秋猶豊富なる前途の大成を期待せらる。京城府崇一洞に住む。

岡田良一

△醫術開業試験出身より奮起して獨學力行克く今日の位地と聲望とを贏得たる岡田良一醫博は、立志傳的異彩に富む篤學者として推獎するに吝ならず。現在にては内務省囑託、拓務省囑託、恩賜財團濟生會囑託の肩書を有し、醫事衛生方面に活動盡瘁しつゝあり。氏は新潟縣三島郡與板町の人、岡田稻尾の長男、明治十一年生にして、同三十四年醫術開業試験合格、爾來秋田、新潟、埼玉、兵庫の各縣に衛生課長として奉職、又國立移民收容所長たり、昭和五年南北兩米、歐洲各國の醫事衛生視察、翌六年十一月官を辭し同時に頭書の囑託となり内務省に勤務す昭和七年三月東京帝大にて學位を授與せらる。專攻は寄生蟲學及び細菌學にして東京帝大教授宮川米次博士に師事して造詣する所あり、殊に寄生蟲科を最も得意とす。

△主論文は「十二指腸蟲ノ經口的並ニ經皮的感染ニ關スル實驗的研究」にして、参考論文は「寄生感染ト年齢、寄生蟲卵ノ體內ニ於ケル運命」及び「尿尿處理ノ實驗的並ニ野外ノ研究」の外數篇あり。性來謙遜家にして、阿諛迎合を好まず、純情なる至誠一貫の士也、而かも天真爛漫たる態度を以て人に接し、敢て學者として銜はず、淡々己を虚うして人に厚うし、諄々として眞實を以て語るところ人に親しまるゝの徳を有す。東京市世田谷區松原町一ノ一二五に住む。

川上六馬

△新進の産業衛生學者にして、現業衛生主任醫として、滿鐵本社衛生課在勤中の川上六馬博士は慶大の出身にて、母校の恩師小林六造教授、京都帝大教授戸田正三博士、倉敷勞働科研究所長暉峯義等博士等に就き



て特に産業衛生學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せる少壯醫博也。研鑽多年、殊に日進月歩の嶄新なる方面の研究として其の存在を認められ、今や其の蘊蓄を傾倒して、斯道啓發振興の爲め努力盡瘁しつゝあるは頗る刮目に値す。而かも年齒未だ少壯にして潑刺たる前途は、更に大に囑望せらるゝ所あり。

△博士は大正十五年慶大醫學部卒業後、直ちに同學部細菌學教室助手を命ぜられ同年九月迄勤務、同年十月京大醫學部衛生學教室専修生となり、昭和二年八月迄勤務す、同年九月倉敷勞働科學研究所に入所、同三年六月迄勤務、同年同月産業衛生主任として鐘ヶ淵紡績株式會社神戸支店に入社す、同七年九月慶大より學位を受領す、同九年六月現職に就任して今日に至る。

△主論文は「日本婦人ノ基礎新陳代謝ノ年齢的變化ニ就テ」にして、參考論文は、(1)自然立位及歩行時ニ於ケル新陳代謝ニ就テ、(2)紡績工場ノ換氣ニ就テ、(3)活動寫真館ノ衛生學的批判、(4)紡績工場ニ於ケル腸内寄生蟲検査成績ニ就テ、等なり。

△「工場及鑛山醫は唯々診療にのみ終始するを止め宜しく産業衛生方面に活動せられたし」云々とは、博士の感想の一片なり。岡山縣川上郡吹屋町川上佐源太の三男にして、明治三十五年生る、年齒未だ三十有四歳也。研究心旺盛にして、少壯の意氣と共に研學切磋猶甚だ勉むる所あり、事に當るや熱誠克く自己の本分を盡し、眞劍にして誠實、部内の信望厚く、一面又能く部下を愛撫し、後進の指導に努め、人に對するに同情と理解とを以てし温情に富む。研究以外の趣味としては俳句を能くし、又圍碁を好む。春秋猶頗る豊富にして洋々たる前途を有す、幸に健康にして、斯道の爲め益々發奮努力あらん事を望む。

### 延川 靖

△長野縣學校衛生技師にして、文部省學校衛生調査會委員として斯道の爲め努力盡瘁しつゝある

延川靖博士は、金澤醫專出身の篤學者にして、豫防醫學の専門家として知られ、慶大教授大串菊太郎、同草間良男兩博士に就きて斯學の蘊奥を究め、所謂慶大派の名醫博として其の存在を認めらるゝ一人物也。學校衛生技師として二十年一日の如く勵精勤績し、斯道啓發振興の爲め多年貢獻する所あり。斯間研學切磋得る所尠からず、今や其の蘊蓄を傾倒して益々指導に努め以て其の範を示す、蓋し地方稀に見る學究的技術者として矚目に値す。

△博士は長野縣師範學校卒業後、二ヶ年小學校教員奉職、明治四十四年金澤醫專卒業、大正三年四月任奈良縣技師、學校衛生主事、同八年四月長野縣技師、學校衛生技師に轉任す、昭和七年十一月學位を授與せられ以て現在に至る。

△主論文は「本邦最高山岳地帯ニ於ケル兒童身體發育ノ特徴(海拔一千米突以上ノ高地ニ就テ)にして、參考論文は、(1)兒童ノ扁桃腺肥大ニ關スル研究、(2)高原地ニ於ケル傳染性疾患ニ就テ(麻疹、百日咳、流行性感冒)、(3)發育不良兒ノ原因別調査、等三篇なり。著書としては、(1)學校應急手當看護法(神田右文館發行)、(2)學校衛生教程等あり。△感想の二三を提示して曰く「現代は尙豫防醫學方面の研究を必要とす、而して我日本人々は疾病に罹ると非常に恐れ騒ぐも、平素此疾病豫防の甚だ無關心なること甚だし、益々此思想普及を必要とす。我國民の健康増進、兒童生活の體力増進は急務なり。其他尙人類學方面の研究を志さんとす」云々。明日の精研に猶縋々として餘裕あるを語る。

△博士は長野縣上諏訪町の出身、明治十七年生れにして當年知命に入る二歳也。小學教員より奮起して其の今日をなせる篤學は、博士の前半生史に輝きて燦然たり。眞面目なる學究的濃厚の紳士、思想高潔にして識見に富み、高邁なる品格を備ふ。豫防醫學の研究と、學校衛生に關する事業とは、畢生の天職として博士の全力を傾注せる所なるが、近來にては人類學方面の研究に多大の興味を有するが如し。趣味としては運動殊に登山、スキー、スケート等を好む風あり。長野市岡田一七五に住む。



**鈴木秀夫** △深山衛戍病院附、陸軍一等軍醫鈴木秀夫博士は、京大系の衛生學者にして、斯學界の泰斗戸田正三博士の門弟として知られ、久しく恩師の指導と薫化を受け、母校より學位を獲得せる斯科界近來の少壯學者也近年暫く健康を害する處ありしも、遂次快方に向ひ、今や捲土重來の意氣を以て、一意専心、奉公の誠を盡すべく努力奮闘、不斷の精進を続けつゝあるは欣幸とする處なり。

△博士は京都の二中より三高を経て、昭和二年京都帝大醫學部を卒へ、同年六月直ちに陸軍二等軍醫に任ぜられ、同五年四月京大大学院入學被仰付、同六年三月任一等軍醫、同八年四月學位受領、同十年八月叙勳五等、同年同月大阪工廠附より現職に轉補せられ今日に至る。學位主論文は「衣服氣候ノ研究」にして、參考論文は(1)衣服環境氣ノ溫度測定法、(2)本邦氣候ト過熱工場内採光方法研究、なり。

△感想に曰く「學界人が意識的か無意識的かは知らず、新聞雜誌に餘りに宣傳的に業績を書き立てられて、忽ちにして忘れられて行く状態を見ては、もう少し考へなければならぬのでしうか、まして自己宣傳に學問を悪用するに就ては言語同斷」云々。

△博士の出身地は名古屋市南區熱田神戸町にして、故陸軍三等軍醫正鈴木協平の長男、明治三十五年生る、少壯未だ三十有四歳也。慎重潔白の人にして、志操堅實なり、強ひて言へば決斷に乏しき缺點なきか。春秋頗る豊富にして、輝しき前途は猶洋々たるの秋、幸に健康にして益々精研活躍あらん事を望む。和歌山縣海草郡加太町深山に住む。

**家原毅男** △京都帝大醫學部衛生學教室に講師として、また大阪市教育部に學校體育衛生の權威ある指導者として家原毅男博士あり。氏は實に篤學の衛生學者にして、三十年を一貫して衛生學に精進し、前半は陸軍に在り軍

醫學校にて衛生學を専攻し、續いてその教官を勤続し、又士官學校の軍隊衛生學教官、教育總監部に陸軍諸學校學校衛生管掌等の職務に在り。後半は更に京都帝大にありて衛生學の研鑽に没頭し、講師として特に營養學、學校體育衛生、工場衛生等の講座に當り、更に獨逸に留學し特に社會衛生學に關する調査研究を爲し、又歐洲各國を巡歴して歸朝、爾來大阪市内に入り二百五十の小學校、その兒童數三十五萬、教員七千名その他幼稚園七十校、中等學校七十校、青年學校百三十校を對象として、その學校體育衛生を指導し、熱烈なる意氣を以て軼身努力、著聞の功績擧げて數ふべからざるものあり。

△氏の經歷を概述せば、明治三十六年現在の京都府立醫科大學、當時の京都府立醫學專門學校を優秀卒業、時恰も日露の風雲急なり、直ちに陸軍を志願して同年十二月陸軍三等軍醫任官、大津歩兵第九聯隊に屬して日露戰役從軍、金州南山の攻撃より得利寺、蓋平、大石橋、牛莊、鞍山站、遼陽、沙河、奉天の會戰を経て法庫門附近に達するまで常に火戰の間に馳驅して功績を擧げ、戰後金鷄章を賜はり不朽の名譽を辱ふするを得たり、平和克復直ちに志願して陸軍々醫學校に入學し、優秀の成績を擧げて衛生學専攻學生を命ぜられ、更に専攻を重ねて此間牧山(建吉)教官に衛生化學を、宇山(道碩)教官に軍隊并に一般衛生學を、稻葉(良太郎)教官に營養並に代謝學醫學を、牧田(太)教官に蛋白化學の指導を受け、續いて軍醫學校教官に在職し、陸軍技術審査部御用掛を兼ね、坑道戰に對する爆藥の爆發瓦斯の中毒除害に關する研究に任し又軍衣、軍隊食糧其他諸種の研究あり、前後約十年衛生學を専攻して日獨戰に至り、廣島衛戍病院附三等軍醫正として戰役勤務に従ひ、了りて再び陸軍士官學校の軍隊衛生學教官となり、同校の教程を編述して多數の陸軍將校の軍事的衛生智識の教養に盡瘁し、又陸軍教育總監部に兼務して陸軍幼年學校其他諸學校の學校衛生を指導し、次いで西比利亞事變に出征し、又大阪衛戍病院に病院附として、姫路衛戍病院に病院長として臨床醫學にも亦携わる所あり、大正十一年に至り官を退きて京都帝國大學衛生學教室にて再び衛生學の専攻に没



頭し、大正十三年講師となり、昭和二年五月京都帝大より學位を享け、文部省在外研究員となり獨國留學、次いで大阪市に視學として學校體育衛生の指導を擔任今日に至る。

△學位主論文は「環境ノ持久的中等度高温ガ山羊ノ乳腺機能ト蛋白代謝ニ及ボス影響並熱疲憊ニ就テ」にして三篇より成る。参考論文は(1)酸化炭素ノ中毒限界量ニ就テ、(2)酸化炭素ノ毒性ニ就テ、(3)氣中ノ酸化炭素殊ニ其微量ノ精密測定ト概測法トニ就テ、(4)水ノ地中竄入ト土地ノ乾燥トニ就テ、外三篇あり。著書に「軍隊衛生學」あり。

△感想を叩くに氏の熱烈なる論點の主なるものは、國民の體力總動員論にあり、如何にも非常時日本にふさわしき大議論にして、氏が大阪市の學生々徒兒童の體力増進に熱中し、更らに進むで全市民の體力増進の爲めに、現在の日本の學校體育を市民體育に轉進し、眞の國民體育たらしめむが爲めに信念的努力を盡しつゝある誠意確然として判明せり、如何にも軍人らしき學究的至誠の士たるの感を深からしめたり。

△博士は明治十五年琵琶湖畔の産、從五位勳三等功五級、豫備陸軍二等軍醫正の印綬を帶ぶ。性格は卒直純眞、熱烈なる正義の氣魄に満ち、談論熱發と謂ふべきなり。極めて精神家にして特に國家を思ふの至情實にその深きに感ぜざるを得ず。頭腦明晰にして緻密、體格は五尺八寸、二十一貫の赭顔大軀、元氣旺盛の人なり。京都東山白川畔に住し、日々大阪に出務殆ど席を温むるの暇なし。趣味は天然風光、殊に樹木愛好、刀劍等。

### 吉植 精逸

△陸軍々醫學校教官吉植精逸博士は、京都帝大系の衛生學者にして、特に兵業體育を最も得意とし、嘗て獨逸伯林醫科大學に學ぶや、ビツケル教授に就て生物病理學を、ローナ教授に就て物理化學を專攻し、其他歐洲各國を視察して大に新知見を博めたり。今や此方面に於ける殊に體育界の一權威として最も矚目せらる學者たるを至囑す。博士は五高(明治四十三年)を経て、大正三年十一月京都帝國大學醫科大學卒業、同三年十二月仙臺歩兵

第四聯隊に陸軍見習醫官として入隊、同四年六月任陸軍二等軍醫、補若松歩兵第六十五聯隊附、同五年三月若松聯隊區徵兵副醫官を被命、同五年八月陸軍々醫學校に專科學生として入校、故醫學博士稱葉一等軍醫正並に醫學博士小泉一等軍醫正の指導を受け榮養學專攻、同六年八月仙臺陸軍地方幼年學校附兼教官に轉補、同七年九月陸軍戸山學校附兼教官に轉補、同七年十二月任陸軍一等軍醫、同十年十月近衛騎兵聯隊附に轉補、同年十一月近衛騎兵聯隊附被仰付同十年十一月歐洲に留學、特に獨逸國伯林醫科大學病理學研究所に於て生物病理學をビツケル教授に、物理化學を、ローナ教授に就き研究、其他諸教授の實習を受け、又休暇及歸朝に際して佛國、瑞西、埃國、チエツクスローバキヤ、和蘭、丁抹、英國、瑞典等各國醫科大學各教室及各國體育學校中小學校、尙一般青少年體育を視察、大正十三年八月歸朝、同月任陸軍三等軍醫正、陸軍戸山學校附兼教官に轉補、同十四年三月京都帝大にて學位を授與せられ、大正十四年五月陸軍戸山學校研究部員兼陸軍々醫學校教官に補せられ、現職に在り。

△學位主論文は「アヴィタミノーゼ」ノ窒素代謝ニ及ボス影響ニ就テにして原著は獨逸文なり。参考論文は(1)運動ノ「アヴィタミノーゼ」ニ及ボス影響ニ就テ、發育動物ニ於ケル鐵同化作用ニ對スル各種「ヴィタミン」ノ意義及「ヴィタミン」缺乏食及「ヴィタミン」含有食ヲ以テ飼養セル動物灰分ノ素成ニ就テ、にして何れも獨逸文より成る。其他論著夥多。著書として(1)解剖生理ト運動、(2)運動生理學初歩等あり。

△博士は千葉縣の人にして、明治十八年生る。純潔なる學者肌の仁にして人格者也。學術の研究を最も趣味とする外繪畫、和歌を能くし、魚釣りを好む、又少年の指導を樂しむ風あり。白鳥庫吉文博とは親戚の間柄なり。東京市中野區沼袋南町二ノ二五に住む。

### 門馬 健次

△大阪帝大派の新人にして、寄生蟲病學者として起ち、特に寄生蠕蟲學を最も得意とせる門馬健



次博士は、現に大阪帝大醫學部講師として第二病理學教室に勤め、又附屬醫院醫員として第一内科に勤め、兼ねて同大學微生物病研究所寄生蟲病學部研究囑託として努力精進し、希望ある將來に向つて自己の進むべき針路を開拓するに餘念なし、潑刺たる前途の展開や頗る囑望すべき也。

△博士は大正十三年大阪醫大卒業後、直ちに同大學病理學教室勤務、昭和八年七月大阪帝大にて學位受領、同九年十月大阪帝大醫學部講師囑託、同時に頭書の現職に就任今日に至れり。斯間大阪帝大教授吉田貞雄博士、同村田宮吉博士、同谷口映二博士等に就て研鑽せり。主論文は「蛔蟲精管內顆粒ノ血清ニ依ル凝集現象並ニ本現象ニ基ク各種蛔蟲輸精管內顆粒ノ異動ニ就テ」及び Agglutinative action of normal blood serum on granules in vas deferens of ascariids の二篇にして、外に參考論文十二篇あり。

△感想に曰く「我國帝國大學醫學部及び官立醫科大學に於て未だ寄生蟲病學講座の設けられざるは甚だ遺憾とする所なり」云々。博士の出身地は横濱市鶴見區生麥町にして、明治三十年生る、當年漸く三十有九歳也。熱心なる研究家にして、學者肌の人、年齒未だ少壯にして、將來有爲の資に富む。研究以外には郊外散策を趣味す。兵庫縣川邊郡小濱村米谷字藏座西六に住む。

### 玉木緝熙

△群馬縣衛生課長として、多年地方衛生、保健上の啓發普及に努力貢獻しつゝある玉木緝熙博士は、日本醫專出身の篤學者にして、公衆衛生學を專攻し、特に細菌學の造詣深く、斯學は氏の最も得意とする處なり學位は慶大より獲得せるが、學位論文を完成する迄には北研肥田博士、慶大草間良男教授及び佐伯榮養研究所長等の指導を受けたり。今や多年蘊蓄せる學識と共に、該博なる識見を有し思慮に富む。會々感想の一片を寄せて曰く「開業醫家がモット豫防醫學に關心を持つことが必要ではあるまいかと思ふ」云々。

△博士は大正二年三月日本醫專卒業、同八年十月群馬縣警察醫拜命、同十年十二月任衛生技師、同十四年二月任地方技師、群馬縣衛生課長を命ぜられ今日に至る、斯間昭和八年十月學位を受領せり。

△主論文は「シツクテスト」及「アナトキシン」ノ豫防接種ニ就テ、(3) On the Schicks Test and the Preventive Injection of Anaboxin (4) 團體的驅蟲ニ用ヒタル「パラジツール」ノ効果ニ就テ等あり。

△長野市平林の人、明治二十三年生る、當年漸く不惑有六、學究的年壯の紳士也。元氣旺盛にして研究心に富み、殊に物事に熱中する長所を有す、事を處するや周到にして几帳面なり。性行は謹直方正、正を愛し邪を惡む、人に對しては親切にして能く後進を愛撫す。多趣味の人にして嫌ひのもの無しと云ふ、就中スキーは最も好む方なり。春秋猶豊富にして、拮据黽勉、精研に餘念なき前途は益々有爲多望なるの秋、切に自重加餐を祈ると共に、爲地方衛生界益々奮闘盡瘁あらん事を。和田正系醫博は從弟に當る。前橋市萩町二七に住む。

### 新畑 慎

△滋賀縣學校衛生技師新畑慎博士は、京都府立醫大派の少壯醫博として其の存在を認めらるゝ新人物也。小兒科學は母校の恩師齋藤二郎教授に、衛生學は京大教授戸田正三博士に就て研究せる結果、母校たる京都府立醫大より學位を獲得せり。主論文は「揮發性果物類ノ揮發力ト中毒乃至消毒ノ關係ニ就テ」にして、外に參考論文としては、(1)「アルコール」類ノ毒力比較研究、(2)「エーテル」及「ケトン」類ノ毒力比較研究、(3)「アルデヒド」類ノ毒力比較研究、(4)炭化水素置換體ノ毒力比較研究、(5)「ベンゼン」類ノ毒力比較研究、(6)「チフス」菌毒素ノ腦内注入ト體溫上昇ノ關係ニ就テ(國重共著)、(7)食鹽水ノ腦内注入ト體溫上昇ノ關係ニ就テ(國重共著)、(8)幼稚園兒ノ食物調査、(9)幼稚園兒ノ夏季林間保育ノ醫學的研究、(10)京都市内學童ノ難聽調査(竹内共著)、(11)京都地方乳兒頭蓋癆ノ



統計的觀察(國重共著)、(12)離乳期ガ乳兒ノ成長、罹患及ビ死亡ニ及ボス影響ニ就テ等あり。

△博士は昭和三年京都府立醫大を卒へ、兵役の任務を了へて陸軍三等軍醫に任ぜらる、次で母校の小兒科教室にて研究の後、昭和五年六月京大醫學部大學院入學、同八年四月滋賀縣學校衛生技師に任ぜられ、同九年三月母校より學位を授與せられ今日に至る。京都市の人、明治三十五年生れなれば、年齒漸く三十有四歳、新進の意氣と共に活動の盛期に入る。研究方面は既に發表せる其の論著を見るも其の一斑を窺はれ、猶精研に餘念なき前途は大に囑望せらる。古美術鑑賞家にして古畫蒐集を樂しみ、又時に山野巡行を趣味す。京都市上京區大宮通上立賣下ル大宮町に住む。

### 西野陸夫

△内務省社會局社會部に社會局技師として北大派の新人西野陸夫博士あり。氏は新進の社會衛生學者にして、氏が社會部へ入りてより幾多の業績を擧げたるが就中、(1)軍事救護法の改正、救護法、少年救護法、兒童虐待防止法の制定に従事せる事、(2)全國社會事業の指導監督に當れる事、(3)不良住宅地區改良に關する事務擔當、特に少年救護院、少年鑑別所、乳幼兒保護事業の指導等は最も重要なものとして既に斯界に認めらる。又住宅衛生に關する研究の爲め財團法人同潤會の委囑を受け實驗室一ヶ所を設立し、猶住宅衛生の根本研究をなすため社會局大西博士と共同にてイオン研究所を設けたるなど、氏が社會的貢獻せる事業は擧げて數ふべからざるものあり。現に日本精神衛生協會理事、民族衛生學會評議員として斯道啓發の爲め盡力する所あり。

△博士は東京開成中學校より北海道帝大豫科を経て、昭和四年三月北海道帝大醫學部を卒へ、同年六月社會局保險部囑託として就任、同五年一月社會部に轉じ、社會局技師任命、同六年十月社會局技師に被任、同九年十二月母校にて學位を授與せられ今日に至る。斯間衛生學的指導は北大井上教授、東大横手教授に受け、尙北大の恩師今、大野、永井三教授の指導をも受く、勞働衛生學的指導は北大講師大西博士及び勞働科學研究所暉峻博士より受け、社會婦人科

學的指導は東大岩田博士より受けたり。專攻は社會衛生學とす。

△主論文は「各種職業ノ生體ニ及ボス影響ニ關スル社會生物學研究」にして、三篇より成れり、參考論文としては、(1)職業婦人ニ關スル社會婦人科學的研究、(2)鐵筋「コンクリート」ノ衛生學的研究、(3)全國特殊兒童收容施設ニ於ケル榮養ニ關スル調査報告、(4)老齡者ノ體格並ニ體力ニ關スル研究等あり。其他社會事業方面に對する雜誌に度々寄稿特に「イリユツベル」救護法制定及び精神薄弱者救護に關する方法問題を中心に數年來論述せるもの尠からず。

△感想に曰く「醫育の改善を要望す(今後の醫政、醫業の進展は社會情勢に順應すべきものなるに醫政、醫業に携はる者を教育する根本の醫育の形態内容は、全く社會的企てのものに沒交渉なるが故に、社會醫學に關する講座の設立を急務とし、次で醫育の全般に亙る改善を要す)、社會事業は今後醫師がその主腦として斯界をリードすべきものなり。尙疾病のみを對象として患者を取扱ひたる在來の醫業は妥當ならず、疾病を有する患者自體をも診斷治療すべきである。豫防醫の完璧を期するため余は保護醫學の確立を期し一生を之に捧ぐる所存である」云々、近時此の一生面を啓發すべき最も新らしき叫びとして謹聽に値すべき也。

△東京市瀧野川區瀧野川町に本籍を有し、西野藤一郎の三男、明治三十四年生る、年齒未だ三十有五歳の少壯也。熱心なる研究家にして精研に餘念なきを見る、潑刺たる前途は更に大に待望せらる。性來他人と争ふ事は嫌ひの方にて圓滿にして他愛主義を標榜す、従つて人に頼まれ事を無碍に斷りかねる方なり、時に或はそれが氏の短所ともならん乎又強ひて言へば或は氣長の癖なきか。正午山人は其號にして、日本音楽を趣味す。姻戚中には田中館愛橘理博、葛西萬司工博、那珂通世文博、野邊地慶三醫博、柄内吉彦農博、葛西勝彌農博等あり。豊島區西巢鴨三ノ七〇三に住す。

### 並河

汪

△臺南州衛生技師にして、兼ねて臺南市立濟生病院長たる並河汪博士は、臺灣に於てマラリヤ治



療方面に多年活躍し貢獻する所あり。氏は臺北醫專出身の篤學者にして、原蟲學及びマラリヤ病學者として其の該博なる學識を認められ、岡山醫大より學位を得たる斯科界近來の名醫博也。殊に氏が二十八歳の年少を以て博士號を獲得したるは、學界近來のレコードとして氏が厚志篤學と、頭腦の明晰とを稱讚せらる。年齒未だ少壯にして潑刺たる研究心を有し、孜々として精研に餘念なき前途は頗る春秋に富む、將來有爲の學究として向後の活躍は更に大に囑目せらる。

△氏は大正十四年臺北醫專卒業後、臺灣總督府中央研究所衛生部醫動物及びマラリヤ研究室に入り、後マラリヤ治療治験所を兼務し、引續き昭和六年四月迄、同所に在りて原蟲學及びマラリヤ治療に就て研究す、同六年四月よりは臺北醫院第二内科に轉じ、同七年五月臺南州衛生技師に任ぜられ今日に至る、同年十一月學位を受領す。

△學位主論文は「原蟲性疾患ニ於ケル各種化學的治療藥品ノ作用方法ニ關スル研究」にして二篇より成る。外に參考論文として、(1)「マラリヤ」治療ニ關スル研究外十五篇あり。以て此の方面に關する研究に對し如何に廣汎なる智識を有するかを察せらる。

△氏は大分縣南海部郡下堅田村並河清水の二男にして、明治三十七年生る。年齒未だ三十有二歳、少壯の才氣潑刺として、向學の精神鬱勃として禁ぜざるものあり。性格より打診すれば、稍や短氣なる嫌なしと雖も、一面には又何事にも積極的に遣りたいといふ勇氣と、其の不撓の精力とは氏が長所と見て可也。兎も角、熱心なる研究家としての眞摯なる態度と、成し遂げずんば止まぬ熱心振りには敢て人後に落ちず、其の力あり熱ある特徴の有るは敬服に値す。趣味としては研究以外に庭球、ラヂオ、ゴルフ等を好む風あり。幸に健康と共に、爲斯學界益々精研活躍あらん事を翹望して止まず。當世博士界中異彩に富む醫博人物として茲に推獎し敬意を表す。臺南市昭和町五二ノ八に住む。

### 石橋 衛

△宮崎縣衛生課長の首班に列し、多年當縣下の衛生、保健、豫防醫學上の指導啓發に力め、至誠以て公に奉ずるの信念を以て努力貢獻しつゝあるは石橋衛博士也。氏は大正八年千葉醫專出身の衛生學者にして、爾來此方面の研究に一路邁進し、九州帝大醫學部衛生學教室にて研究の結果、學位主論文「高齢者ニ關スル衛生學的研究」を完成、九州帝大醫學部へ提出して、昭和八年八月同大學より學位を獲得、斯科界近來の名醫博として其の存在を認められ、今や九州醫學界に於ける新進人物として其の將來を最も囑目せらるゝ所あり。

△氏は千葉縣の出身にして、明治二十七年生る。年齒漸く不惑に入る二歳、年壯の意氣に燃え、研究心に富む、學究的の紳士也。幾多の研究業績を發表し、今猶精研に餘念なく斯道の爲め努力盡瘁する所あり。著書「長壽法新論」は好評を以て迎へられ、識者の間に愛讀せらる。文學趣味の人にして文才あり、時に暇を得れば太公望を極め込みて釣を味ふ道樂あり。賦性謹直、勵精恪勤の人にして、事に當るや熱誠忠實を以てし、徹底的に成し遂げずんば止まぬ所に氏の長所あり。猶洋々たる前途は頗る春秋に富む、幸に健康にして、爲斯界益々精研盡力あらん事を望むや切也。宮崎市花殿町官舎に住む。

### 中本 覺二

△哈爾濱衛戍病院附中本覺二博士は、金澤醫專出身の篤學者にして、軍陣衛生學を専門とし、特に化學兵器方面に關する研究に興味を有し造詣する所深し、慶大教授小泉親彦博士及び同末吉雄治博士指導の下に學位主論文「運動ノ臟器生化學的研究」を完成して、昭和十年二月慶大より學位を獲得せる斯科界近來の少壯醫博として其の學識を認められ、此の方面に新手腕を展ばさんとする將來有爲の新人物也。

△氏は石川縣石川郡二塚村字中野の出身、明治二十五年生にして、金澤醫專卒業後、陸軍に入り軍隊附及び軍醫學校科學研究所員を経て、現に衛戍病院附として哈爾濱に在り。年齒當に不惑に入る四歳、霸氣満々として剛健の氣象に



富み、研究心潑刺たるものあり、至誠奉公の念に篤く、其の職務に勵精努力し、孜々として精研に餘念なし、猶洋々たる前途や頗る春秋に富む。爲國家切に自重加餐を祈る。滿洲國哈爾濱市大直街六八に住む。

三浦運一

△滿洲醫科大學教授にして、衛生學界現代の一權威として最高學府に囑目せられつゝある三浦運一博士は、京都帝大派の名醫博中に逸色せる衛生學者にして、斯學の泰斗戸田正三教授の愛弟子として知られ、嘗て米國に留學するや、ジョンズ、ホプキンス衛生學校に學びD.S.Hのタイトルを得、研鑽大に得る所あり。該博なる學識を有し、年來の蘊蓄を傾倒して教壇に起ち、滿洲醫育の爲め誠意誠實を盡して努力盡瘁する所あり。

△博士は兵庫縣立姫路中學、第三高等學校を経て、大正六年京都帝國大學醫學部入學、同十年七月卒業、直ちに同大學衛生學教室に入り戸田教授につきて衛生學專攻、同十二年二月同大學助手被命、同十三年四月同志社女學校專門部講師囑託、同十四年四月任京都帝國大學助教授、醫學部衛生學教室勤務、同年九月依願免官、直ちに南滿洲鐵道會社へ入社、南滿醫學堂教授兼滿洲醫科大學及同專門部教授被命、同十五年五月滿洲醫科大學教授兼同專門部南滿醫學堂教授、衛生學教室主任被命、昭和二年三月京都帝大にて學位授與、其後米國に留學せり。

△學位主論文は「防暑防寒的效果ヨリ見タル本邦各種造構家屋ノ比較研究」にして、(1)防暑効果ノ比較研究、(2)暖房上ノ得失ヨリ見タル本邦各種造構家屋ノ比較研究、(3)防暑防寒上ニ於ケル室壁鋪裝ノ効果ニ就テ、の三篇より成る。參考論文としては(1)滿洲日本人死亡統計ノ衛生學的考察、(2)本邦建築材料ノ比熱(熱容量)測定、(3)亞鉛ばらつく建築ノ室溫ノ變化ニ就テ、(4)腺べすと流行ト鼠屬發育トノ氣候的關係(成澤、富井共著)。等あり。

△博士は明治廿九年神戸市に生る、本籍は兵庫縣明石市西魚町に在り。文藝趣味の人にして、又運動を好む。賦性謹直、高潔なる學者肌の紳士として敬意を表す。奉天稻葉一七に住む。

著作權及版權所有  
不許複製及轉載

昭和拾壹年壹月參拾壹日印刷  
昭和拾壹年貳月七日發行

「批判研究・博士人物・醫科續篇」奥附

定價金八圓

著者 井 關 九 郎

東京市世田谷區羽根木町一六八〇

發行者 井 關 九 郎

東京市牛込區新小川町一ノ二

印刷者 野 見 山 恭 行

東京市牛込區新小川町一ノ二

印刷所 一 葉 社 印 刷 所

東京市世田谷區羽根木町一六八〇

發行所

會社資 發展社出版部

振替口座東京三九九〇三番



井關九郎著・登載人員壹千〇七拾參名

# 批 判 博 士 人 物

# 醫 科 篇

特價 菊版約七百頁  
提供 特價四圓五拾錢  
殘部 僅少 (定價六圓)

井關九郎監修 △和歐兩文 △國寶的學術研究大資料

# 大 日 本 博 士 錄

四六倍版 大冊  
既刊 四千頁  
豪華版

第壹卷 (法學、藥學之部)……………既刊  
第貳卷 (醫學之部)……………既刊  
第參卷 (同上)……………既刊  
第肆卷 (同上)……………既刊

第五卷 (工學之部)……………既刊  
第六卷 (理學、文學之部)……………未刊  
第七卷 (農林、獸醫、經商、政、其他)……………未刊  
以上全七冊(第一期計畫)

此特價金八拾貳圓五十錢(別送料)既刊第五卷迄五冊 但分冊賣各卷  
第六、七卷未刊の分近々完成の上は第八卷以下醫學の續篇を續刊する計畫也

## 新 刊 學 位 大 系 博 士 氏 名 錄

十一年版 (四六倍版・約五百頁)  
定價參圓五拾錢(送料共)

明治二十一年五月より昭和十年十一月十五日迄各科博士總數壹萬〇七百七拾貳名全部登錄學位順  
記載事項……氏名、本籍、學位授與日附、大學名、出身校、海外留學又は視察、專門、現職、現任  
所等、故人は死亡年月日、相續人及び其住所を登載す。

發行所

東京市世田谷區羽根木町一六八〇

合資

發展社出版部

振替口座東京三九九〇三番



534  
81



